

**今、社会福祉界の思想・制度/政策・実践の救世主として
考えられている共生／共生社会についての懐疑的な一考察**

～「懐かしい未来」志向から学ぶべきこと：

緊喫に求められる発想の転換と勇氣ある決断～

○西南学院大学 賀戸 一郎（001374）

共生／共生社会 「人間の論理」／「自然の論理」 「利己的遺伝子」論

I. 研究の社会的な背景：研究の目的

本研究は、近代化がもたらした功罪—人間の暮らしとその基盤（人類と地球）の存続を危うくしているという認識のもとに、その危機を生み出している根本的・本質的要因を概念的に整理することによって、社会福祉の基本思想・理念や社会福祉の理論体系—制度/政策（ソーシャルポリシー）と社会福祉実践（ソーシャルワーク）の再構築にわずかながらでも貢献し、人類と宇宙船地球号の存続のためにあるべき志向と基本的行動指針を提示することを目的としている。

II. 研究の視点及び方法

本研究の視点は、高度経済成長、競争主義、効率効果主義、拝金至上主義、新自由主義、グローバリズム等が現代社会における危機的な社会問題を引き起こしているという基本的視点に立脚し、先行研究・先行的な試み、とりわけ、経済学、社会学、動物行動学、生物学、文化人類学、民俗学、水俣学／水俣文学等の分野から提示されている知見、洞察、提言、具体的な試行等から学んだことを礎として論議を展開している。

III. 倫理的配慮

本研究は文献研究によって行う。文献研究においては、日本社会福祉学会研究倫理指針「学会発表」の規定を順守して本研究をおこなっている。

IV. 研究結果

(1) 宇宙船地球号において人類と自然の環境が直面している3つの危機

- ①環境の危機（＝自然環境・地球環境）
- ②人間の危機（人間関係の危機）
- ③アイデンティティの危機（心の危機）

もとよりこれらの危機は、近代文明が人間に約束した幸福な社会の到来という神話を裏切る仕方で行進してきた（“文明の罪”＜石牟礼]礼子氏の言葉＞）と言えるだろう。科学技術文明の進歩と高度経済成長は、生活様式や交通・通信様式の劇的な革新を背景に、私たちの限りない欲求の充足と生活の快適さを約束するものであった。啓発の理念は、人間の人間に対する支配や抑圧を解消し、迷妄から解放された自律的存在としての人間を予言してきた。

しかし、近代文明はこれまで人類が経験したことのない環境破壊、環境危機を引き起こし、解決の展望なしにその危機をなお進行させているし、社会レベルでは人間関係の希薄化をもたらし、濃密な人間関係を取り結ぶはずである家族においてもその崩壊や危機を引き起こし（下重暁子＜2014＞『家族という病』）、社会問題化する病理的な宗教（新興宗教）が後を絶たず、私たちの心の危機、アイデンティティの危機をもたらしている。（河野勝彦＜2007＞『現代課題の哲学的分析』）

われわれ「文明」を享受している者から見れば、狩猟採集という生き方はひどく遅れたものと映るかもしれない。食うか（や）食わずの飢餓線上の人たちだというイメージさえある。

しかし、農耕の延長線にあるわたしたちの世界ははたして手放しで素晴らしいといえるのだろうか。豊かであると言い切れるのだろうか。産業文明社会、情報化社会（ソーシャル・メディア）という時代に住むわたくしたちの世界には、地球環境の汚染、貧富の格差の拡大、人びとの心の荒廃、家族や共同体（コミュニティ）の崩壊など枚挙にいとまのないほどの「悲劇」がまるで堰を切ったよ

うに日常茶飯事に表面化してきている。特に人類と自然環境との折り合いについての課題は切羽詰ったところにまできている。

地球全体をひとつの生命体と考えたとき、他の生きもの（動植物・微生物）や環境に負担をかけ続けながら人間だけが無限に人口を増やし、繁栄していくという考え方には、どうしても無理がある。そのことに人類はすでに気づいているのだけれども、ではわれわれは解決に向けて何をどのようにしたらよいかという、いまだ妙案はないというのが正直なところだ（船尾 修<2006>『循環と共存の森から一狩猟採集民ムプティ・ピグミーの智恵—』）。

(3) 考察

●現代社会の危機を生み出した近代化（近代社会）の本質：「人間の論理」と「自然の論理」の相克・・・共生／共生社会は現代社会においては幻想か、それとも構想か？！

わが国における動物行動学の草分け期のヨーロッパから導入した研究者のひとりと称される日高 敏孝氏の見解に基づいて「人間の論理」と「自然の論理」に分類し、この二つの理論の根底には「利己的遺伝子」論が大きく左右しているという。

「利己的遺伝子」論とは、生物の個々の個体は、それぞれが自分自身の遺伝子をもった子孫をできるだけたくさん後代に残そうと努力している。そのためには他人の子を殺すとか、たとえ自分の子であっても、ひよわで先の望めない子は見捨てて、母乳や食物の無駄な投資を防ぐとか、自分のメスの体内にある他のオスの精子をかき出すとかいう「残酷な」行動も辞さない。助け合って種族を維持していこうなどという様子は見られないのである。

「共生」と言われるものについても同じである。よく例に出される花と昆虫

よく例に出される、花と昆虫の場合で言えば、花は自分の子孫（種子）をできるだけたくさん実のらせるために、昆虫を利用して花粉を運ばせようとする。蜜をつくるのはコストがかかるから本当は蜜など作りたくはない。しかし何もないと虫が来てくれないから、しかたなくすしだけはつくる。それをできるだけ吸いにくくして、虫が努力している間に花粉がたっぷり虫の体につくようにしている。

昆虫のほうは、植物のために花粉を運んでやる気などさらさらしない、欲しいのは蜜だけである。けれど、植物のほうは蜜を奥深く隠しているから、懸命になってもぐりこんでいくか、口吻を長くして吸いやすくするほかない。

進化の長い時間の間、花と昆虫の間で、このように「利己的なせめぎあいが続いた結果」今日見られるような花と昆虫のみごとな「共生」ができあがった。昆虫が口吻を長くして遠くからでも蜜が吸えるようになっていくにつれて、花のほうも細く長く形を変えて、昆虫の頭の先に嫌でも花粉がついてしまうように進化した。だから、今日の「共生者」たちは、お互いにうまく適合している。しかしそれは、はじめから互いにうまく助け合いましたよね、と言って始まったことではないのである。

このことを念頭において、流行りの「共生ファッション」を見ていると、いったいこれでよいのだろうか心配になってくる。これで本当の共生ができるのであろうか。

今述べたとおり、自然界での「共生」は互いの利己のせめぎあいの上に成り立っている。人間が建物を建てるのは、人間の利己である。人間の目的に沿うように、そして多くの場合、建築家のアーチストとしての満足感を満たすように建物は建てられる。

問題なのは、これが全く一方的で、そこになんのせめぎあいもないことだ。

これも近頃流行りの「環境にやさしい」「地球にやさしい」建築物は環境との調和をはかったとか環境を汚染しないように配慮した建物であると言うように見える。けれど、ここで言われる環境とはなんなのか。

従って、「人間の論理」が「自然の論理」を克服することが共生社会を構築できるか否かのカギを握っていると言えよう。当日詳細な資料を配布する予定にしています。